

マルゼラ・ファウスト
は愛を知らない ~追
放された女神は占色術
師として恋の相談承り
ます~

文雨惠潤

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「女神は他を愛へ導く象徴である。決して女神自身がを他を愛す事は許されない」

禁を犯した女神は呪術を掛けられて赤子になり、地上へ追放される。伯爵に拾われ
た赤子はマルゼラと名付けて大切に育てられる。侯爵令息のエルメールと運命の出
会いをして婚約する。しかし、理由も分からず一方的に婚約破棄されてしまう。そこか
らが、マルゼラの試練の始まりだつた。全てを失い、愛されるものから裏切られたマル
ゼラは生きていく意味を失くし、死ぬ事を決意して実行するが何故か上手くいかない。

こんな所に居ては駄目だと館を飛び出して旅を始める。命を絶つ方法を探しに・・・
旅の途中で訪れた、人里離れた小屋の老婦人と出会い、呪術、占術、魔法を教えて貰つ

た事で、彼女の人生は大きく変わることになる。元女神の才能が開花し、占術師として迷える奥方の恋の悩み相談が評判になり相談が殺到する事に。今迄の受け身だけの人生から、自分で考え行動し、時には葛藤しながらも、人助けをするマルゼラの成長と恋の物語。なろう様、カクヨム様にも掲載中。

目

プロローグ

私はマルゼラ

次

8 1

プロローグ

「女神は他の者へ愛を与える立場であり、断じて自身が愛を育む事は許されない。よつて、お前を天上から追放処分とする」

天上の国王自ら私に処罰を言い渡した声が、綺麗に装飾された裁判所の中に響きました。

よつほど頭にきていたのでしよう、裁判官が判決を言うのを遮つてましたから。

私の背後には傍聴しているそうそうたる神族の顔ぶれがありました。背後からの重圧が私にのし掛かり、立つてているだけで精一杯で、ただ一言「はい」と答えるしかありませんでした。

分かっています、全て私が悪いんです。一度、愛し、愛されてみたかったのです。

その場で結審になり、後ろ手に縛られて裁判所から退廷しました。その時、傍聴席に私が愛した方が座っているのが見えました。視線を彼に向けると一瞬目が合いましたが直ぐにそらされました。

私に有利な証言をしてくれると少しでも彼に期待した私がいけないんです。

彼は保身の為に私を売りました。私が誘惑したのだと。その弁明が裁判所で認めら

れ、彼は一切おとがめなしでした。

でも分かっているんです、彼は天上の第一王子、つまり次期国王。不祥事はあってはならないんですから。



どれくらい時間が経つたのでしょうか？

真っ暗な牢獄に入れられてから随分と時間が経つように感じました。

食事配膳係の方以外は牢獄に誰も面会に来ませんでした。ベットとトイレが有るだけで衛生面で耐え難く、今まで経験したことの無い劣悪な環境が私の精神に異常をきたし、何度も泣き崩れ、出して欲しいと懇願しましたが、私の声は空しく響くだけでした。

コツツ

コツツ

近づいてくる足音が聞こえました。

誰かが面会に来てくれたのだと喜び扉へ近づくと、

「地上へ追放される日が明朝に決定した」

と、看守の方がドア越しから伝えるとそのまま足早に去つて行きました。

明朝… 私はどうやつて生きて行けば良いのでしょうか？

ドン！

隣の房から壁を叩く音が聞こえ、耳を壁につけると殿方の声が聞こえました。

「地上へ追放かい？ 天上では死刑よりも辛い耐え難い刑なのにな？ 君はどんな罪を犯したんだ？」

私は、ありのまま起きた出来事を全て話すと、同情からかこれから追放される場所、つまり地上の事を話してくれました。しかし、聞いているうちに絶望の感情しか出ませんでした。

地上では邪淫、大食、貪欲、憤怒、異端、暴力、邪悪、反逆があるそうです。

幼い頃に聞かされた地獄そのものでした。

そんな所へ落とされてしまつたら、とても私が生きていいける環境に思えない…：

追放当日の朝、扉を叩く音が聞こえたので近づくと彼でした。

「何も力になれなくて悪いと思っている。私に発言権さえあればここまで大事には…」

「ならばせめて、地上への追放だけでも回避出来るように国王へ進言して頂けないで

「しょうか！　お願ひします！」

「そ‥：それは出来ない。正直に言おう。お前が天上に残ると私にとつては色々と不都合なのだ。それだけを伝えに来た」

私が素直に聞くと思っていたのか、思わぬ私からの懇願に彼は動搖し、応えた声色が本音を表している気がして、遠ざかる足音に向かつて生まれて初めて怒鳴りました。

「卑怯者！　罪悪感から私に謝つて貴方だけスッキリしただけじゃない！」

私がこんな大きな声を出すなんて‥：自分自身に驚いた後、空しくなり、あんな男に一瞬でも愛してしまった自分自身に腹が立ち、その感情が収まるごとに、涙が溢れてくれました。

ドン！

壁を叩く音が隣の房から聞こえてきました。

「酷い男を愛してしまつたな。まあ、気にしないことだ。この世界の半分は男だからな。探せばもつと良い男も沢山いるさ」

「‥：はい」

この男は私を慰めているつもりなのでしょうか？お世辞にしても‥：不器用な方。

「地上へ行つたら日が出てる間は肌を極力隠さないと肌が焼ける。まあ、防止する魔法もあるけどな‥：それに、人間は勿論だが、魔族には気を付けな。あいつらは神族

側だが別物だからな。とにかく他人を簡単に信用せず、自分の為に生きながらえることだ。まあ、俺の助言は無駄になるけどな。おそらく、あんたは記憶も能力も奪われて地上へ追放されるはずだ

「……ありがとうございます。あの、貴方はどうして色々と教えてくれるのですか？それに、どうして牢獄へ？」

「気まぐれさ。ここに居る理由は地上へ追放されるあんたには関係ないことだ。おつと、あんたのお迎えがきたみたいだ、生き永らえれば良いこともあるさ」

「……ありがとうございます」

私は力無いお礼をすると、ちょうど来た看守2人に牢獄から連れ出されました。

牢獄の外へ連れ出されると、久しぶりの朝陽がとても眩しく感じ、視界が暫く真っ白になり見えませんでした。

徐々に視界が見えてくると同時に目の前に見える光景に絶望しました。

目の前には、国王と彼、看守2人、そして…そして黒いマントを被った呪術師。

呪術師を見て固まっている私を見て彼が言いました。

「そのままの姿では何かと不便だと思つてな、地上の生活に相応しい姿と性格に変える事にした。せめてもの温情だと思つてくれ」

私が睨み付けると、彼はさつと視線を外しました。

「最低な男！後ろめたさが無ければ視線を外す事なんて無いでしょ。

「女神であるお前が眉間に皺を寄せて、我が息子を睨み付けるとは… とことん堕ちたものだな。女神は従順であるべきだ」

国王が私に言うと、呪術師に顎で指図をしたのが見えました。

後ろ手に縛られて看守2人に組伏せられた私は、為すすべなく呪術に掛けられるしかありませんでした。

呪術を掛けられている間、私の身体がどんどん縮んでいき、髪の色、肌の色が変色していくのが分かり、最後には赤ん坊の姿にされていました。

「父上、後は私に任せて下さい。私を誘惑した性悪とはいえ、騙された私にも責任の一端があります。この手で刑を執行してけじめをつけさせてください」

「良いだろう。地上へ落とす前に記憶を消すことを忘れるでないぞ？」

国王は彼の願いを聞き入れ、呪術士を残して看守と共に去っていきました。

彼は周りに誰も居ないことを確認すると呪術士に命令していました。

「記憶を消すのと一緒に愛殺『あいさつ』の呪いを掛けろ」

その命令を聞いて慌てて首を横に振る呪術師に彼は更に強く命令をしていました。

『次期国王』の命令だぞ？ お前も地上へ落とされたいのか？ 直ぐにやれ！」

彼は人差し指を噛んで出血させると、私の額に何かを書きました。

呪術師は私に向かつて両手をかざすと、不快な詠唱を唱え始めた。

ああ・・・ 記憶が無くなるのはせめてもの救い。どうか地上では幸せな生活が送れます様に。

意識が途切れるなか、彼は赤ん坊になつた私を抱き上げ、地上へ落とす前に確かにこう言いました。

「たとえ地上へ追放されたとしても、お前が私以外の者を愛して幸せになることは決して許さない」

これが女神であつた私の最後の記憶・・・

1. 私はマルゼラ

おぎやー

おぎやー

おぎやー

「奥様良く頑張りました。生まれましたよ！元気な女の子です！」

私はお父様に連れられて、お母様の元へ向かう。そこで初めて妹のリリアと対面することになった。未だ3歳だった私は、初めて見る赤ん坊の姿と大きな声で泣いている姿にびっくりして、お父様の手をギュッと握りしめると、お父様もにつこりと笑つて握り返してくれた。

「マルゼラ、お前に可愛い妹が出来たよ。名前はリリアだ。仲良くするんだよ」
「・・・うん」

私は妹が出来て喜んだつて言いたいけど、正直嬉しくなかつた。だつて、独り占めにしていたお父様とお母様を妹に奪われるなんて絶対に嫌！

お父様とお母様がとても嬉しそうにしている顔を見て、嬉しいどころか嫌な気持ちにしかなれなかつた。

これから家族4人、私の幸せな生活が今日で終わる……妹なんか死んでしまえば良いのに……

妹が生まれた同日、私を担当している侍女の1人が不慮の事故で亡くなつたと聞いた。これで二人目。



妹のリリアが成長していくにつれ、私に対するお母様の態度がどんどん素っ気なくなつた様に感じた。

最初は只の勘違いだらうと気にしないようにしていたんだけど……

私が10歳の時、お父様の提案で、画家を呼んで家族4人の肖像画を描いて貰うことになった。

お父様はヤジュマ帝国貴族の伯爵だった為、肖像画一枚を書くのに、どの一流画家にするか、日取りを何時『いつ』にするか、段取りを決めるのにお父様と周りの大人達がバタバタしているのをリリアと一緒に見ていた。

「数日後」

「マルゼラ、リリア、今日は待ちに待つた肖像画を描いて貰う日だ。化粧室へ行つて目一

杯お粧ししてもらいなさい」

お父様から言わると教育係のユーカが来て、はしやいでた私達を化粧室へ案内してくれた。化粧室ではお母様が侍女と一緒に待機しているのが見えた。

侍女に案内されるまま、私とリリアはお互に背を向け、それぞれ全身が映る鏡の前に立つた。

私はチラツと、鏡越しにリリアを見た。

リリアは私と3歳差なのに身長は少ししか変わらない。きつとお父様に似たのだと思う。また、お母様に似て肌が白く、艶のある綺麗な黒髪と透き通った黒い瞳、そして小顔で足が長かつた。

その事を、化粧を施している侍女達に誉められていた。

それに比べて、私の容姿は…

お父様にもお母様にも似ている所が見当たらない。

ブラシをかけてもかけてもボサボサのくすんで白髪に近い髪の色と赤茶けた肌の色、それに付け加えて濁つた瞳で、お世辞にも容姿で誉められる部分は無い。

お母様はリリアに付きつきりで化粧、ドレスにあれこれ口を出し、侍女達に何度も修正させていた。

「お母様、どうですか？」

私は、準備が整つたのでお母様の意見を聞いてみた。勿論、何か助言をくれる事を期待して。

「良いんじやない？ 準備が出来たならお父様の所へ先に行つてなさい」

お母様は私に興味が無いのか、直ぐにリリアの方へ向き直した。

「はい……お母様」

お父様の元へ戻つた私の姿を見てとても誉めてくれ、唯一気持ちが救われた瞬間だった。

「お父様！ お姉様！ 見て見てー！」

無邪気に駆け寄るリリアの姿を見て唖然としてしまつた。私が着ている地味なドレスとは正反対のとても華やかなで、装飾が施されたドレスだつた。

リリアを見てショックな事があつた。首に掛けられたネックレス……あれは、お母様が大事にしていたネックレスで、私が大きくなつた時に譲つてくれると約束してくれた装飾品だつた。

私との約束……お母様は忘れてしまつたの？

きつとりリアが我儘を言つて無理やり付けさせて貰つたのだと、あまり考えない様にしていた。

でもそれだけでは終わらなかつた。同じ様な場面が何度もあり私の疑念は確信に変

わつた。

お母様は私の事が嫌いなんだ

それからと言うもの、私はお母様に対し心を閉ざしてしまった。

それだけじゃない。妹のリリアは成長するに連れて、姉の私より自分がお母様に溺愛されているという自覚が芽生え、何かと私を見下してくるようになった。

でも、お父様だけは変わらずに私の事を大事にしてくれる。でも仕事が凄く忙しそうで中々会えないけど、唯一の心の拠《よ》り所だつた。



気づいたら20歳になつていた。

周りの同じ年頃の女性達は次々と貴族の方達と婚約をして家庭を築き始めていた。

お父様から何人かの素敵な殿方を紹介されたけど、結婚に全然興味が無いし、何よりも私の容姿を見て皆さん及び腰になつてしまふ。

私は、生まれつき肌が弱く、小さい頃から日の光に当たると軽い火傷になつてしまい、

極力外出時には肌の露出を避けるようにとお父様に口酸っぱく言われていた為、ベールを身に付けるようになっていた。私の肌は凄く纖細みたい。

一度、言いつけを守らず、軽装で家の外を出た時は、肌が火傷をして炎症を起こし、治療するのに時間がかかった事があつた。

「どうしてマルゼラをほつたらかしにしたんだ！」

その時に記憶に残っているのが、お父様がお母様を激しく叱っていた事。
後にも先にもお父様が怒っている所を見たのはこれが最後だった。

お父様に言い付けられたのか教育係のユーカは、私が外出する時はベールを必ず身に付けているか確認をとるようになつた。そのせいで、同年代の子供達に奇妙な目で見られるようになり、次第に外出するのを避けるようになつた。

だから、小さい時に外で思いつきり遊んだ記憶が無く、部屋の窓からお母様と妹のリリアが軽装で楽しそうに外で遊んでいたのを羨ましく思つていた。

何で、私だけこんなに思いをしなければならないのか？つてずつと思つて生きてきた。

でも、お父様が私の為に室内でもおもいつきり遊べるように、と色々と配慮してくれ

た事で私は卑屈にならずに済んだかも知れない。
そんなある日、

「マルゼラ、明後日に フエレス公爵家の社交界があるんだ。ファウスト家として招待されて いるから、準備しておくように」

「はい お父様」

正直気乗りしないけど、お父様に迷惑をかけまいと二つ返事で答えた。